

～一方、遂に墜ちたりっぴとココノは～

「それでは、こちらが浴場になります。えっと...」
と首をかしげるココノ。そう、今はスイートリップから七瀬凜々子へと戻っている性か、どちらの名称で答えれば良いか迷っている様だ、それが可笑しかったのか、微笑みながら「どちらでも良いですよ、ココノさんが呼びやすい方で呼んで貰って構いませんよ。」と、微笑みながら返す。

「では...凜々子さん、こちらが浴場になりますので、こちらで身を清めてお待ち下さい。メツァー様もそろそろ帰還なされる頃ですので」と、想い人の名前を聞いただけに胸が高鳴る凜々子。

「ふふ...ではごゆっくり...私は凜々子さんの新しい着替えをお持ちしますので」「着替え？」

と、不思議そうに返す凜々子。

「ええ、これから同じくメツァー様に仕える身になりますので、それ相応の格好をしてもらいますので」

という言葉聞いて顔を赤らめる凜々子。それを察したのか、少し苦笑いを浮かべながらココノが

「大丈夫ですよ。そんな卑猥な格好では無いので。基本的には私と同じ服装になります」それを聞いて安堵したのか、小さくため息を吐く凜々子

「ふふ...では...」

と、浴場から離れていくココノ。そして、粘液や汗でべとべとになった身体を洗うべく、凜々子も足早にシャワーへと向かうのであった。

そして数分後、シャワーを浴び、湯船に浸かっていた凜々子の元に、同じく一糸纏わぬ姿で浴場へ入ってくるココノ

「すみません、私も汗をかいたので、一緒に汗を流させて貰いますね」

そして、シャワーを浴びた後、同じく凜々子と肩を並べて湯船に浸かるココノ、そして、何気なくココノが凜々子へと問いかける

「...凜々子さんは、メツァー様のどこに惚れたんですか？」

「教導学園でメツァー様と初めて会った後、他の男性には無い優しさを感じて、段々好きな気持ちが出てきて...それで敵として私の前に現れた時はショックだったけど、それでも学園生活の時の優しさが忘れられなくて...私も聞きたかったんですけど、ココノさんはどうして？」

一瞬、ココノが昏い表情を見せる、しかし、湯気の性か、凜々子は気付かなかった

「私は以前、アップルナイトという騎士団に所属していて、ゼーロウの軍勢との戦闘に敗れ、ゼーロウへと連れて行かれて、陵辱の限りを尽くされていました。それこそ、死にたくなるくらいに。その時、ゼーロウに幹部として就任したメツァー様が出した案があって、実験的に、捕らえられていた私がメツァー様に預けられました。最初、私は相手が変わっても、陵辱されるだけだと思っていましたが、メツァー様は違いました。時には陵辱もありましたが、優しく接してくれていたメツァー様に、いつの間にか惹かれていて、気付いたら、今の自分になっていました。」

「そうでしたか。」

と、その話を聞いて、どれだけ凄惨な思いをしたのかと考え、気が下がった凜々子を察したのか

「長湯になりましたね。そろそろ上がりましょうか」

と笑顔で話しかけるココノに頷く凜々子であった。

そして、脱衣所で、ココノは早々に着替えを始めたが、凜々子はどうしても着替えの手が進まない、これを着る事によって、完全に今までの生活と別れる事になるのを分かっているだけに、手が進まないのだ。先に着替え終わったココノがそれを察したのか

「凜々子さん、大丈夫です。メツァー様は絶対貴女を大事にしてくれます。だから、勇気を出して一歩を踏みだして下さい。」

と微笑みながら語りかける。その微笑みを見て、勇気付けられたのか、意を決して着替え始める凜々子。そして数分、最後に帽子を被った凜々子を見て

「良かった、ぴったりです」

と、笑顔を零すココノ。そして、鏡へと通される凜々子。そして...

「これが...私？」

スイートナイトの衣装も大胆とは感じていたが、それ以上に赤と黒を基調とした魅惑さを感じる大胆な衣装に身を包んだ自身を見て、胸が高鳴る。

「お似合いですよ、凜々子さん...それでは改めまして、これからもよろしくお願ひします。共にメツァー様の為に頑張りましょうね」

と、笑顔で挨拶をするココノ。それにはにかみながら

「こちらこそ、よろしくお願ひします。」

と返す凜々子であった。

「ふふっ、それではメツァー様が間もなく帰還されますので、お迎えに上がりましょう」

「はい、ココノさん」

と相づちを打って、魔法陣へと向かう2人であった。